

藤原宮外周帯の調査

—第197-4次

1 はじめに

本調査は農業用水路改修にともなう事前調査である。調査地は、藤原宮南面大垣および南面中門の南約25mに位置し、南面外濠と六条大路の間にある外周帯と呼ばれる空閑地に当たる(図135)。また、これまでの調査成果から、調査地は藤原宮内で確認されている先行朱雀大路の想定位置を含むことがあきらかとなっている。したがって本調査区についても、条坊側溝等が検出されることが予想された。

調査区は、水路に沿って南北幅約2m、東西約100mで設定し、発掘をおこなった。調査期間は2018年11月19日～12月14日、調査面積は216㎡である。

2 基本層序

調査区の基本層序は、①現代水路関連層(厚さ0.4～0.5m)、②褐色砂質土(厚さ0.2～0.5m、古代の整地層か)、③青灰細砂～粗砂(厚さ0.2～0.5m、古墳時代以前の河川性砂礫層)、④暗褐色砂質土(厚さ0.2～0.3m:Y-17,630以東、縄文時代晩期の包含層)、⑤青灰粘土(沼状堆積層、地山)である。調査区は水路による削平が著しく、古代の整地層の可能性のある②層は平面では残存していない。そのため、遺構検出は③層～⑤層でおこなった。遺構検出面の高さは、標高74.3～74.7mである。

3 検出遺構

調査区内は、水路による削平のため、遺構の残存状況はよくなかったが、南北溝4条、斜行溝1条、井戸1基を検出した(図136・137)。

南北溝SD11521 調査区西部で検出した。幅1.1m、深さ0.3m。上面は現代水路によって削られている。埋土には細砂を含み、流水の痕跡がある。

南北溝SD11522 調査区西部で検出した。幅4.2m、深さ0.4m。調査区南壁土層で、②層から掘り込んでいることを確認した(図141)。埋土は砂層であり、流水の痕跡がある。溝心の座標は、 $X = -166,706.2$ 、 $Y = -17,697.0$ である。藤原京朱雀大路西側溝の推定位置に

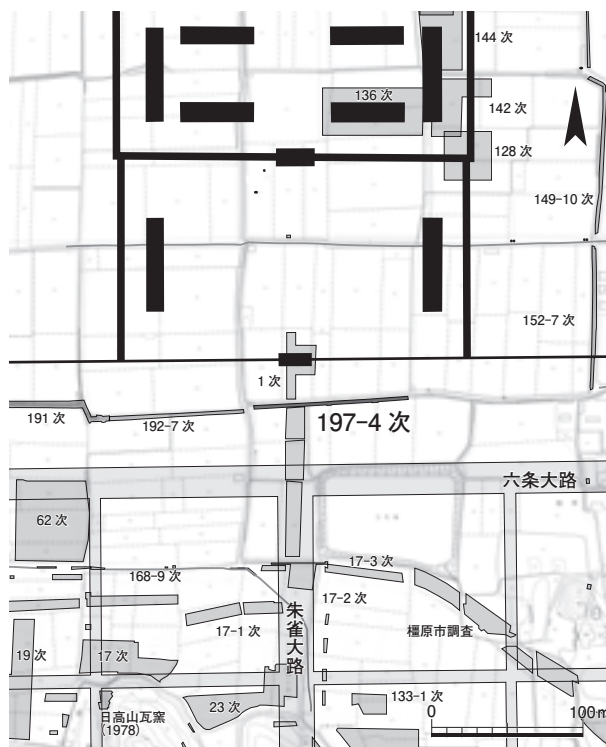


図135 第197-4次調査区位置図 1:5000

あたる。埋土からは弥生土器1点が出土した。

南北溝SD11523 調査区西部で検出した。残存幅1.0m、深さ0.2m。溝の上面は現水路によって削平されているため、底面のみがかるうじて残存する。溝埋土は②層に似た褐色粘質土であり、流水の痕跡は認められない。先行朱雀大路西側溝の推定位置にあたる。溝心の座標は、 $X = -166,705.9$ 、 $Y = -17,689.1$ である。埋土から遺物は出土していない。

南北溝SD11524 調査区中央よりやや西で検出した。幅2.8m、深さ0.3m。埋土から遺物は出土していない。

南北溝SD11525 調査区中央よりやや西で検出した。近世～近代の耕作用水路で、調査区から約50m南方に位置するコモ池より、水を引き込むために造られたとみられる。調査区内で現水路と合流する。幅2.0m、深さ0.5m。SD11525付近は朱雀大路東側溝の推定位置にあたるが、SD11525によって削平された可能性が高い。

斜行溝SD11526 調査区東部で検出した北東方向に斜行する流路。推定幅約3m、深さ0.6m。SE11520に壊される。埋土から古墳時代の土器が出土した。

井戸SE11520 調査区東部で検出した。SD11526を掘り込む(図140)。掘方は東西幅3.3m、深さ1.3m以上。井戸枠が少なくとも2段残存していた。下方が井籠組になっており、その上に両端下部に欠き込みをもつ横板の材を落とし込んで井戸枠とする(図138・139)。井戸枠の

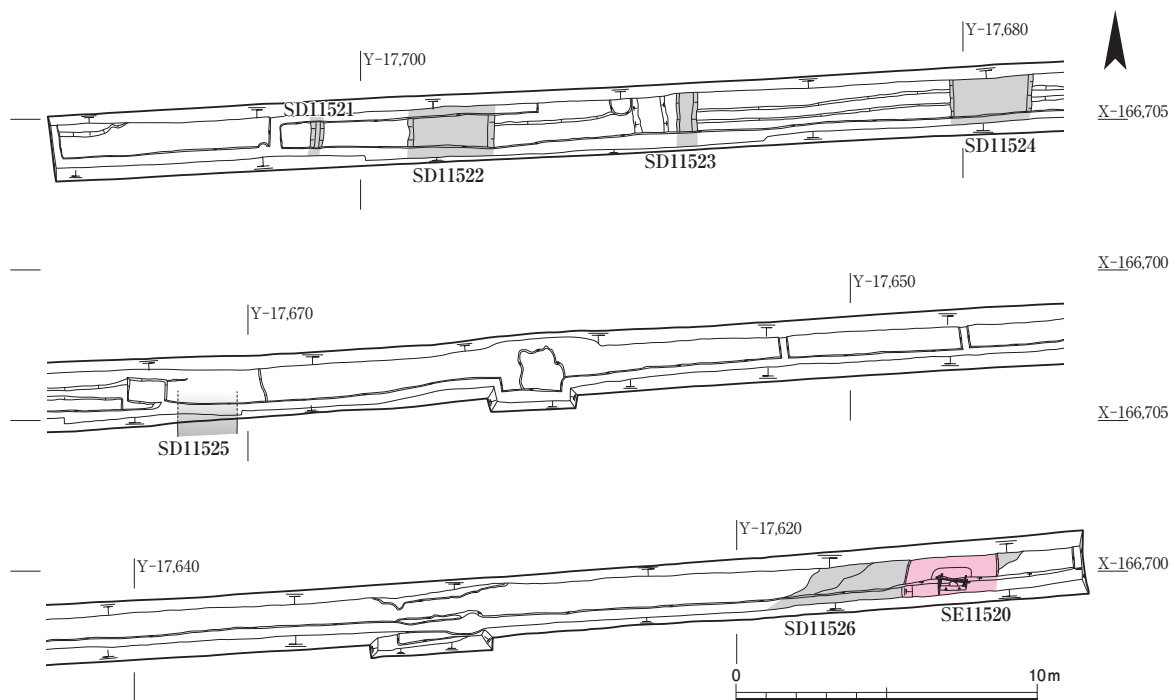


図136 第197-4次調査区遺構図 1 : 250



図137 第197-4次調査区全景（西から）

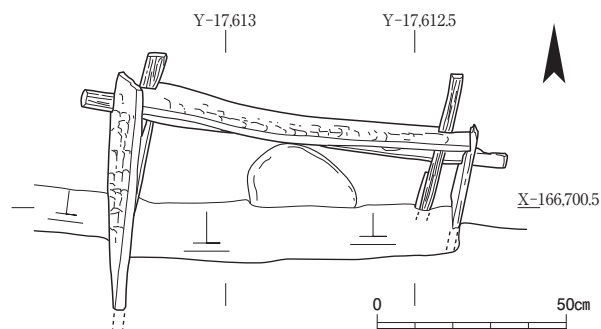


図138 井戸SE11520平面図 1 : 20



図139 井戸SE11520検出状況（南から）

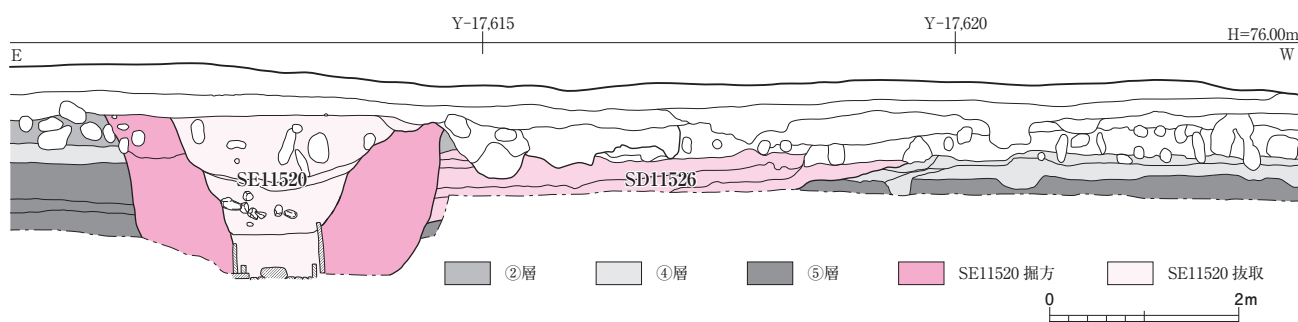


図140 SE11520・SD11526断面図 1 : 80

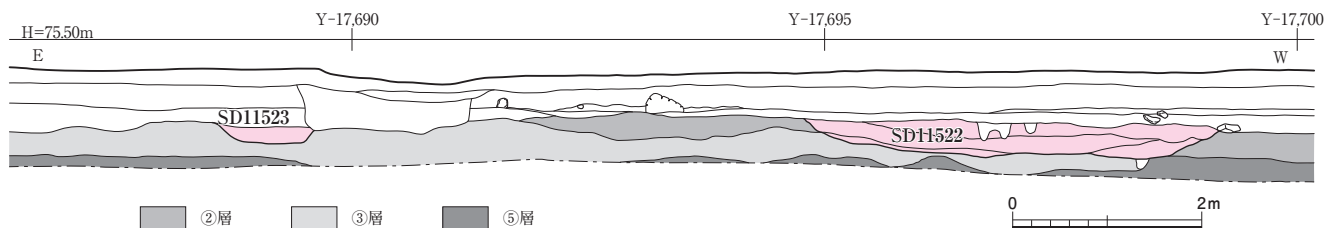


図141 第197-4次調査区西部南壁土層図 1 : 80

表19 第197-4次出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6273	B	1	6643	C	1	面戸瓦	4
6274	Ab	1	6647	D	1	熨斗瓦	8
6281	A	1	重弧文		1	瓦製円盤	2
不明(古代)		1	不明(古代)		1	土管	1
巴(近世)		1					
計		5	計		4		
		丸瓦			平瓦	榛原石	
重量		25.6kg			71.6kg	0.5kg	
点数		260			1,006	1	

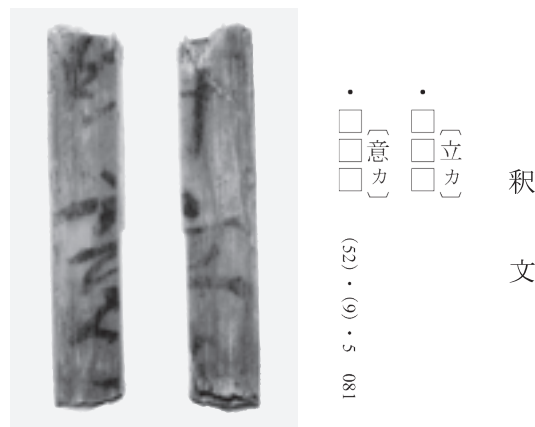


図142 SE11520出土木簡 1 : 1 (赤外線画像)

内法寸法は86cm。井戸枠板材(図143)は、上段の北面材のみを取り上げ、そのほかは現地保存した。

掘方からは、木簡1点と7世紀後半の土器、箸などの木製品が出土した。一方で、掘方や埋土からは藤原宮所用瓦は1点も出土していない。また、取り上げた井戸枠板材は、年輪年代測定で最外層が644年という数値が得られている。これらより、SE11520は藤原宮大垣が完成する以前、宮造営期の比較的短期間使用されたことを示すと考えられる。(石田由紀子)

4 遺物

土器 本調査区からは、整理用の木箱で6箱分の土器が出土した。その大部分は①層から出土したもので、細片が多く特記すべきものはない。以下、調査区東部で検出した井戸SE11520から出土した土器について述べることにする。

SE11520出土土器は、その多くが土師器甕や須恵器甕の胴部片で、時期を特定できる個体はごく一部にかぎられる。井戸枠内と掘方の双方から、暗文をとどめた土師器食器の小片が1点ずつ出土しているほか、かえりをもたない須恵器の杯蓋片が1点出土している。このうち、暗文を残す土師器片のひとつは、二段放射暗文をほどこした杯Aの口縁部片であり、7世紀後半のものと思われる。出土土器からはSE11520の年代を詳しく決定することができないが、井戸が藤原宮造営期のものであるとの解釈とは矛盾しない。(森川 実)

瓦磚類 本調査区から出土した瓦磚類を表19に示す。

大部分が現代水路関連層である①層から出土した。軒瓦は小片で磨滅が著しい。軒平瓦6647Dは、香川県三豊市宗吉瓦窯産で、南面中門の所用瓦のひとつである。重弧文軒平瓦は、弧線や胎土の特徴から、南東約450mに位置する小山廃寺所用のものが流入した可能性がある。

今回の調査区から出土した瓦磚類は、軒瓦の出土量に比べ、面戸瓦と熨斗瓦の出土量が目立つ。この傾向は、西に隣接する第192-7次調査区でも同様で、通常の建物よりも丸・平瓦に対して相対的に熨斗瓦や面戸瓦の比率が高くなる大垣の様相を反映しているとみられる。(石田) **木製品・金属製品ほか** 井戸SE11520掘方から箸、板材、角材、燃えさし、削片などが出土し、抜取穴からは角棒材などが出土した。このほかにも、SE11520からは、イノシシ上腕骨、鉄滓、モモ核が出土した。

また、①層から銭貨(寛永通宝)、火打石、サヌカイト片、輪羽口、壁土などが出土した。(片山健太郎)

木簡 井戸SE11520掘方から1点出土した(図142)。上下両端切断、左辺割れ、右辺削り。上下両端の切断は廃棄の際になされたものであろう。表裏両面に三文字ずつの墨痕が残る。表面二文字目は偏がつく可能性もある。文書木簡の断片と思われるが、文意は不明。(山本 崇)

5 井戸SE11520枠板について

形状および加工痕跡 SE11520を構成する部材のうち、北面の最上段の板材1点を取り上げた(図143)。長さ918mm、幅370mm、厚さ18mmの板目材で、両端下部に枠組外側に落とし込むための88×60mmの欠き込みをもつ。内面

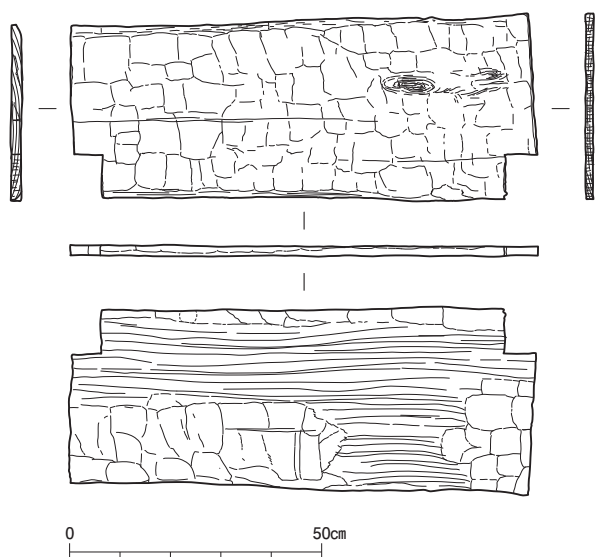
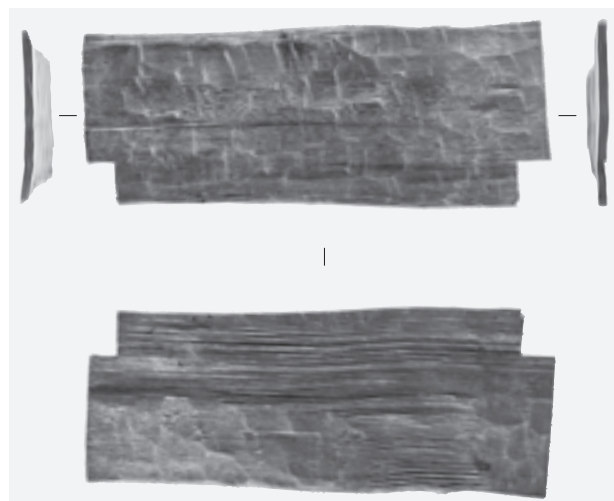


図143 SE11520出土井戸枠板材 1 : 15



は割板製材ののち厚い部分のみチョウナではつっており、割肌面も残る。一方、外面は全面をチョウナではつる。西端木口にはノコギリの痕跡が残り、東端木口には、腐食により不明瞭ながらも、ヨキとみられる痕跡が残る。

(鈴木智大)

樹種同定 SE11520枠板材の薄切片プレパラートを作製し、生物顕微鏡で観察した。その結果、仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる針葉樹材で、晩材部の幅が狭く、樹脂細胞が早晚材移行部から晩材部に偏在し、ヒノキ型の分野壁孔が1分野に2から3個みられることから、分析対象の樹種をヒノキと同定した。

年輪年代測定 SE11520枠板材の木口面を、ミクロームナイフおよび剃刀で切削し、胡粉を塗布して年輪界を明瞭に観察できるよう調整したのち、デジタルカメラで接写撮影した。得られた画像をCybis社製年輪計測ソフトウェアCooRecorderを用いて年輪幅を計測した。クロスデーティングは、SIEM社製年輪分析ソフトウェアPASTを使用し、年輪曲線をプロットしたグラフの目視評価と統計評価¹⁾をあわせておこなった。分析対象は板目取りの板材であったため、2方向の測線を設定し、それらの年輪曲線をクロスデーティングして照合が成立した箇所での平均年輪曲線を構築した。その結果、126層の平均年輪曲線を得ることができ、これを分析対象を代表する年輪曲線とした。標準年輪曲線群とのクロスデーティングでは、平城宮跡出土品で構築されたヒノキの標準年輪曲線²⁾と最外層が西暦644年となる関係で照合し、 t 値は10.1であった。分析対象には、樹皮は残存していないものの、両端部に色味の白い部分が残存しており、この部分を辺材と判断した。辺材と判断した部分は厚さ10mmで、35層の年輪が残存している。これらのこ

とから、原木が伐採されたのは644年以降それほど経たない年代と考えられる。

(星野安治)

6 まとめ

本調査では、主に以下に示す3つの成果が得られた。

1点目は、藤原宮外周帯で宮造営期の井戸SE11520を検出したことである。藤原宮大垣周辺では、これまでも井戸が5基みつかり、外周帯でも宮南西隅付近(第37-6次)での検出例がある³⁾。外周帯は藤原宮にのみ存在する特殊な構造であり、その広大な空閑地の役割はいまだ不明である。SE11520の存在は、宮造営期には外周帯部分が利用されていたことを示している。

2点目は、朱雀大路西側溝と先行朱雀大路西側溝の推定位置で、それぞれSD11522とSD11523を検出したことである。ただし、両溝から古代の遺物は出土しておらず、朱雀大路や先行朱雀大路の西側溝と断定はできなかった。今後の周辺の調査成果をまちたい。

3点目は、③～⑤層の広がりを確認し、藤原宮造営前の調査地周辺の旧地形をしる手がかりを得たことである。特に③層と⑤層は、第191次・192-7次調査でも確認しており、調査地一帯のかなり広い範囲に軟弱な地盤が広がることが判明した。藤原宮造営に際しては、大規模な造成による土地改良が不可欠であったことを物語る。藤原宮造営前の調査区一帯の状況を示す、重要な成果を得ることができた。

(石田)

註

- 1) Baillie, M.G.L. and Pilcher, J.R. "A simple crossdating program for tree-ring research" Tree-Ring Bulletin 33, 1973.
- 2) 田中 琢編『年輪に歴史を読む－日本における古年輪学の成立－』奈文研、1990。
- 3) 黒崎 直「藤原宮の井戸」『文化財論叢Ⅱ』奈文研、1995。